



鹿児島県教育委員会賞

笑顔をつなげる

志布志市立有明中学校 三年

下戸 良佑

「おはよう。下戸君が来たから、ほら、雲がきれてお日様が出てきたよ。」少しくすぐったくなるような言葉だが、優しい笑顔につられて、私も自然と笑みがこぼれた。「おはようございます。今日は暑くなりそうですね。」しかし、一年前の今頃は、こんなに自然に笑える日がくるなんて思ってもいなかった。

同級生四名の小さな島の学校から転入してきた当初、私は、人の多さやにぎやかさに戸惑い、友達とどんな話をしたらいいのか、どんな風に笑ったらいいかさえ分からなくなっていた。みんなが自分をどう思っているか悩む日々。毎朝、軽いため息をつきながら登校していた。そんな時、「おはよう。今日もいい天気だね。」近所の写真館のおじさんだった。ふと顔を上げると、そこには私を包み込むような穏やかな笑顔と、突き抜けるような青空があった。「お、おはようございます。」眩しさを感じながら私は挨拶をかえした。

暑い日も寒い日も、風の強い日も土砂降りの日も、おじさんは毎朝交差点に立ち、私に、変わらない笑顔と挨拶をくれた。「テストはどうだっ

たかい。」「いやあ、ちょっと難しかったですね。」「運動会の練習は進んでいるかい。」「はい、頑張っています。」「何気ない会話であったが、温かい気持ちになれた。笑顔と挨拶と短い会話。この魔法の三点セットは私の心をゆっくりと、だが確実に、明るく、前向きなものに変えてくれたのだった。

そんなある日、私はふと気になったことを聞いてみた。「おじさんはいつからここで挨拶をされているんですか。」「うん。最初はね、自分の孫を見送りたいだけ始めたんだけど、もうその孫が二十歳だから、十四年くらいになるかな。今はみんなの笑顔が嬉しくて続けているねえ。」私は驚いた。きっかけは自分のお孫さんだったのが、十年以上も毎日続けており、そして結果的に、私の気持ちにも変化を与えてくれたのだから。

おじさんはもちろん私だけでなく、その交差点を通るみんなに笑顔で挨拶をし、安全に横断できるように見守り、車の運転手さん達にも手をふっている。まるで、おじさんが交差点の朝を操っているかのように。毎日のその変わらぬ光景が、私に安心感と一日の元気をもたらしてくれる。

「私も誰かの心に明かりを灯すことはできるだろうか。私が笑顔にしてもらえたように、私も笑顔をつなぎたい。」そう強く思い、私は今、朝早く登校し、校門で挨拶運動を行っている。眠い日もあるし、面倒だなと思ってしまうこともある。だが、続けることの大切さも教えてもらったので、頑張りたいと思う。今までは受け身だった挨拶を自分から行うようになって、さらに気持ちは明るくなった。

「おはようございます。今日もいい天気ですね。」「おはよう。いってらっしゃい。頑張っておいで。」今日も笑顔がつながる。心地よい初夏の風が、私の背中を軽く押ししてくれた。

〔審査評〕

新しい環境になかなか馴染めずにいた作者が、おじさんとの出会いを通じて前向きな気持ちと笑顔を取り戻す過程が、短い言葉と、時折挿入される情景描写によって、爽やかに表現されています。おじさんについてもらった笑顔を、今度は自分がつなぎたいと行動するところに、作者の大きな成長を感じます。これから多くの人に笑顔をつないでくれることを期待しています。

